

〔研究ノート〕

M こども園における子どもの創造性を育む 音楽表現活動の捉え方とその実践について

—園長へのインタビュー調査から—

田 中 知 子
Tomoko Tanaka

大阪総合保育大学大学院
児童保育研究科 児童保育専攻

本研究の目的は、M こども園において子どもの創造性を育む音楽表現活動がどのように捉えられ実践されているかについて明らかにすることである。調査協力園であるM こども園の系列園園長3名（内、1名は理事長を兼任）にグループでの半構造化インタビュー調査を行い、収集したデータをM-GTAで質的分析した結果、22の概念と7つのカテゴリーが生成された。そこから得られた知見として、園長らは乳児期から幼児期への発達を踏まえた遊びの連続性や、日常の遊びと行事のつながり等を常に意識し環境を整え、園生活のあらゆる場面で創り出すことの重要性を示している。又、子どもと保育者、両者において創造の持久力を育むことを第一とし、その力が創造性を育む音楽表現活動の基盤になると捉えていることがわかった。実践においては、表現に伴う快の感情を土台に活動を展開していることが確認できた。さらに、子どものつぶやきを取り入れ保育者が創った曲を子ども達自身で新しい表現に変化させるなど、保育者と子どもの表現活動に往還が見られることがわかった。加えて、保育者も表現者としての主体性を持ち、子どもと互いに影響し合って表現を生み出すことが大切と考えていることが示唆された。すなわち、M こども園における創造性を育む音楽表現活動とは、表現に伴う快の感情を土台にあらゆる場面で創り出す体験を積み重ね、創造の持久力を育むそのプロセス全体を指していると捉えられる。

キーワード：創造性、創造の持久力、日常と行事のつながり、子どもと保育者の往還する表現活動、表現に伴う快の感情

I 問題と目的

保育現場における音楽にかかわる表現活動は日々行われ、その内容は、童謡の歌唱、鍵盤ハーモニカの演奏、合奏、リトミック、マーチング、オペレッタなど実に多様である。園に取り入れられる表現活動は各園の方針によるが、共通すべきことはそれらを体験することによって、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』（2018）領域「表現」に示される豊かな感性や表現力、創造性が育まれることである。

領域「表現」のねらいは、「美しさとの出会い」「自分なりに表現して楽しむ」「豊かなイメージによる表現」といった体験を柱に子どもの創造性を豊かにすることである。しかし、田崎（2013）によると「現場では、音や音楽を有機的に使って子どもの表現力を養い、創造性を

育てているとはいえない実践も存在する」と示されている。

創造性の定義については多様な捉え方があるが、本稿ではヴィゴツキー（1930, 2002新訳版）が述べる、「私たちの日常生活では、創造とは生存するための必要不可欠な条件でありますし、形式的なおさまりの域を越えるものすべて、たとえわずかでも新しい部分を含んでいるものすべては、人間の創造の過程で生まれたもの」を土台に、誰もが日常的に行っている小さな創造を繰り返す中で、創造性は育まれると位置づける。

それでは、保育現場において創り続ける体験を要に、創造性を育むような音楽表現活動はこれまでどのように行われてきたのだろうか。次に先行研究を概観してみる。

子どもの創造性を育む音楽表現活動¹⁾に関する先行研究には、研究者が子どもの創造的な音楽表現を引き出すプロジェクトを考案し、保育現場での有効性を検討したもの（小池, 2015, 2019；三輪, 2018；南谷・永津, 2022；坂井・佐野・岡林, 2023）、子どもの創造的な音

大阪総合保育大学大学院

〒546-0013 大阪府大阪市東住吉区湯里6丁目4-26

tomoko_t328@yahoo.co.jp

音楽表現を認知発達の側面から検討しているもの（坪能・木村・味府・小川・蓑，2005）、子どもが「音・音楽にかかわり創り出す」ことを保育目標に掲げ、保育者自身が日常の保育の中で実践しているもの（出原，2016；乙部，2018；藤田・清水・川口・岡，2019）などがある。

今回は音楽の専門家ではない保育者が、子どもの創造性を育む音楽表現活動をどのように捉え、遊びにおける子どもの発達や日常の保育・行事とのかかわりにおいてどのように実践するかを探るため、保育者自身が保育計画を立て取り組んだと考えられる実践報告を対象に整理することとした。

出原（2016）は、子ども達が生活の中で「能動的に音・音楽に関わり、感じたことを自分らしく表現し、友達と一緒に表現活動を楽しむこと」を重要視し、そのような活動が実現できる環境構成や援助の工夫について述べている。例えば、4歳児（幼稚園）の事例から「既製の楽器ではなく身近な材料を自由に叩けるように環境構成し、自分から音に関わる姿を温かく見守り、気づきや発見に丁寧に応答する」保育者の援助が、「友達の鳴らす音を聴いて感じたことを擬音で表したり、バチを変えて多種多様な音を生み出したり、歌詞に一音ずつ重ねたりするなど、より鋭敏に音を感受し、自分なりのイメージや考えを表出する」（下線は引用者による。以下同じ）下支えになったことを報告している。また、生活音や自然の音、身近なものに関わって発せられる音などに気づき、素朴な音を感じ取る力が、「響きのある美しい音を感受させ、豊かな表現を形成させていく」と示唆している。

藤田ら（2019）は、勤務園（幼稚園）の教育方針の一つである「創造の芽を伸ばす教育」を取り上げ、「『あそび』から『創造性』を引き出す保育をねらいとした保育実践」における子どもの姿を紹介している。具体的には、3歳児が「秋の自然で遊ぶ」中、「乾いた落ち葉や、湿った落ち葉・・・それぞれの状態で音がなったりならなかったり、違った音であったりすることに興味を持ち、何度も試そうとする姿」が見られたことや、どんぐりを保育室の床に落としたり斜面に転がしたりして遊ぶなど、「3歳児なりに試行錯誤する姿」が見られたと報告している。さらに、「落ち葉の音探し」から子どもの音に対する興味や探究心が芽生え、「自然物と廃材を使い、みたてたり工夫したりして、楽器作りにつながった」ことも重ねて報告している。

以上のような子どもの姿を踏まえ、「あそび」から「創造性」を引き出すためには、「子どものつぶやきを大事にし、子どもの好奇心や探究心を揺さぶる環境を設定し、子ども達が試行錯誤できる時間や空間を保障するこ

と」が大切であると述べている。また、「子どもの様子を見逃すことなく、援助者として子どもの発見の共感者になったり、見守ったり、適格な働きかけをしていく必要がある」と示している。

乙部（2018）は、幼稚園の4歳児クラスにおいて、音を介した表現が遊びの中でどのように展開していくかを参与観察した結果、「環境と相互作用することにより芽生えた音を介した表現は、幼児が音を試行錯誤してつく
ることを通し、アイドルごっこの中で文化としての音楽的表現へと展開していくこと」を明らかにしている。この展開を支えたものは「音への気づきを促す保育者の日常的な援助」と示唆しており、具体的には「保育者の周到な準備や受容的な援助が遊びを発展させ、遊びの発展がまた、幼児の音を介した表現の展開を促した」と述べている。

上記のように先行研究においては、子ども達が環境にかかわり自然の音に気付いたり、音そのものや音の違いに興味をもって探索・探究する姿が明らかにされている。さらに、自分なりの音を創るために色々試したり、音遊びの試行錯誤から文化としての音楽的な表現へと展開させたりする姿も示されている。加えて、そうした子どもの「あそび」から「創造性」を引き出す様々な保育者の援助についても言及されている。しかしながら、子ども自ら主体的に音にかかわって創り出すような音楽表現活動が、保育現場において日常的に実践されるためには、さらなる多方面からの知見が必要と思われる。

そこで、本研究では、法人及び園の特色として「1. 子どもの心に寄り添う、理解に近づく」「2. クリエイティブに、アーティストのように」「3. 楽しいこと、幸せなこと」という考えのもと、子どもの創造性を豊かにする表現活動を積極的に行っているMこども園に、研究協力を依頼することとした。Mこども園は自然や身の回りの環境と触れ合い、地域社会とのつながりを築きながら、子ども達が主体的に創り出す体験を大切にしている。例えば、藍の栽培から手ぬぐいに染色を行うまで、地域の染色家の協力を得ながら、子ども達がすべての行程を行うことに毎年チャレンジしている。そしてその過程を、一つひとつの体験として捉えるだけではなく連続的に捉え、子ども達がどのように感じ試行錯誤してきたかを丁寧に見取る保育を実践している。そのようなことから、音楽表現に関する活動においても、園の方針を踏まえた実践が展開されているのではないかと判断し依頼に至った。以上を踏まえ、本研究では、Mこども園の園長へのインタビューを通して、子どもの創造性を育む音楽表現活動がどのように捉えられ実践されているかについて明らかにすることを目的とする。なお、

Ⅱ研究方法以下において、子どもと表記する際は、0～5歳児クラスの子どもの対象とし、特に乳児期と表記する場合は0～2歳児クラスの子どもの指し、幼児期と表記する場合は3～5歳児クラスの子どもの指すこととする。

Ⅱ 研究方法

1. 調査方法の選択

A市Mこども園において、系列園の園長3名（内、1名は理事長を兼任）にグループでの半構造化インタビュー調査を行った。収集したインタビューデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下M-GTAと表記）を用いて質的分析を行った。

M-GTAを分析方法として選択したのは、①実践から理論を構築する質的研究法の一つであり、木下（2003, 2007）によって方法論が確立されている。②データを切片化せず文脈で捉えることで意味のまとまりを抽出する分析であり、半構造化インタビューに有効である。③人と人との相互作用の動きを説明することに有効であることから、保育者と子どもの対人援助過程における相互作用の説明に適している。④既知の部分を含みながらもすでに理解されている形ではなく、別の視点から意味づけることで経験的知識の再構成につながる。こうした理由により、M-GTAが実践研究としての本研究の目的に合致すると判断した。

2. 対象者の概要

研究協力者が運営、勤務する園では、先述したように子どもの興味や自主性を尊重しながら、子ども達が自由に表現できる環境づくりを大切にしている。また、その中で、子どもが好奇心や意欲、探究心を高め、自ら創り出す体験の積み重ねを重視している。

筆者は、Mこども園のそうした方針が音楽表現活動の根底にも浸透しているならば、子ども達自ら環境に働きかけ音を創り出す活動も行われているのではないかと考え、法人系列園の園長3名にインタビューの依頼を行った。

理事長を兼任する園長Aは法人の保育全体の運営に携わっており、園長B、園長Cは、Mこども園において保育者としてのキャリアをスタートさせ、現在、園方針を一貫して保育に還元できる人材として園長に起用されている。そのため、三者三様のインタビューによる相違点を明らかにするのではなく、主として園長Aへのインタビューを中心に据えながら園長B、Cが園長Aの考えを補足する形で調査を行った。以下に園長A、B、

Cの園での役割を示す。

園長Aは、ギターを使って即興的に自分で歌を創ったりすることが得意であるため、運動会や誕生会で歌われるテーマソングおよび、表現遊び発表会における「こどもたちの言葉に基づく楽曲」を作曲し、提供している。さらに、各行事において、子ども達や保育者と共に歌うことや即興遊びを楽しんだり、竹を使用しての撥打ちでリズム遊びを行ったりするなど、表現者としてのかわりを大切にしている。また、そのような遊びの体験が、子どもや保育者にとって、音楽や音環境に溶け込み真に自由な表現体験となることを意図してかかわっている。加えて、園内の音楽遊び担当保育者への助言を、求めや必要に応じ、随時行っている。

園長Bは、日常から保育内容に関しての報告や相談を受け、口頭での具体的助言・指導を行っている。また、現場へ出向き担任保育者（以下、担任）の保育実践を見守るとともに、必要に応じて、その場で直接的に指導を行ったり、園長自身が実践して見せたりしている。そうした中、子どもへの直接的なかわりについては、できるだけ担任が子どもとやり取りできるように配慮している。なぜならば、子どもとのやり取りを通して担任が手ごたえを感じたり、自身の課題に向き合い次の保育へと繋げていったりするためである。

園長Cは、園長Bと同様に、日常的に保育内容等の具体的な助言・指導を行い、必要に応じて担任の保育・実践を見守り、共に実践するなどしている。また、誕生会の催し「あそび屋さん（年6回）」に毎回参加し、園長Aや月替わりの担任と共に、即興遊びを子ども達に紹介して広げている。

このように、園長A、B、Cは、日々子ども達と活動を共にする保育者という立場そのものではないが、直接的・間接的に子どもや保育者とかかわりながら、子どもの創造性を育む音楽表現活動を繰り広げる一員としての役割を担う立場にある。それと共に、現場の保育者がその手応えを感じられるようにサポートする立場でもある。それぞれの実践・活動において、子どもの出来栄よりも、活動に取り組む子どもの表情・楽しみ具合・自信の高まり具合、やる気などを確認しながら、職員間で共有している。

なお、インタビューの結果判明したことであるが、注2に示すように、本園はミュージッキング²⁾の考えに基づいて創造性を育む音楽表現活動に取り組んでいる園である。

3. インタビューの手続き

2021年6月12日、A市Mこども園において、園長

3名にグループでの半構造化インタビュー調査を行った。「M こども園において、子どもの創造性を育む音楽表現活動はどのように捉えられ実践されているのか」を明らかにするために具体的な質問項目を6個作成し、それをガイドとしながら、会話の流れに応じて質問する順番は適宜変化させた。調査は約100分行った。質問項目は以下のとおりである。

(質問1) 保育の中で以下のような表現活動は行われているでしょうか。

- ・ピアノ伴奏やCDに合わせて季節の歌や生活の歌を歌う。
- ・子どもと共に身の回りのものを素材とした楽器づくりをする。
- ・生活発表会などの行事で手づくりのオペレッタや音楽劇を行う。等

(質問2) 子どもの創造性を育む上で、音・音楽にかかわる表現活動は必要でしょうか。必要とお考えの場合、その理由もお聞かせください。

(質問3) 子どもの創造性を育む音・音楽にかかわる表現活動とは、具体的にどのようなものだとお考えでしょうか。(どのように捉えているかのイメージや概念、子どもの姿を伺います)

(質問4) 実際に園で行われている、子どもの創造性を育む音・音楽にかかわる表現活動をお答えください。(例えば、どのような活動をしているか、実際の活動内容を伺います)

(質問5) (質問4)でお答えいただいた表現活動を行う際、どのような準備や子ども達への援助を行っているでしょうか。(例：物的環境の準備、保育の展開、子ども達へのかかわりや言葉がけなど)

(質問6) そのような経験を通して、子どもに感じてほしいことや育ててほしいこと等、先生方の思いや願いはどのようなものでしょうか。

4. 倫理的配慮

インタビュー開始時に、本研究の目的、調査内容、ICレコーダーによる音声録音について紙面をもって説明した。また、本研究への参加は自由であり、協力しないことによる不利益はないことも説明した。音声データに関してはハードディスクに保存し、研究終了後に破棄することで了承を得た。なお、本研究は大阪総合保育大学倫理委員会の審査と承認を受けて実施した(承認番号：児保研-054)。

5. 分析の手順

分析対象者は研究協力を依頼した3名の園長で、分析テーマは「M こども園における子どもの創造性を育む音楽表現活動についてどのように捉え実践しているか」である。

分析のプロセスについては、園長3名のインタビューの内容を切片化せずにそのままデータ化し、各データの関連箇所注目しつつそれらをまとめ概念化する。次に概念のまとまりごとに対して見出しをつけカテゴリー化し、さらに、抽出された概念やカテゴリーの関係性を捉えて理論化するものである。本研究においては、保育方法学・保育内容学・教育方法学を専門とする研究者一人とのデータ分析によって、客観性を高めた。

Ⅲ 結果

1. 生成された概念とカテゴリー

保育者へのインタビューの内容についてトランスクリプトを作成し切片化したところ、143個のセグメントに分けることができた。それをM-GTAで分析したところ、22の概念と7つのカテゴリーが生成された。生成された概念とカテゴリーを表1に示す。なお、ヴァリエーションに記載しているA、B、Cは3名の園長を示し、ヴァリエーション内の数はセグメント番号である。

表1 M こども園における子どもの創造性を育む音楽表現活動の捉え方とその実践

カテゴリー	概念	定義	ヴァリエーション
① 保育の価値観	1. 人とのつながりを重視する表現活動	表現活動をミュージッキングの考え方で捉える。	A：ミュージッキングだからここの園全体が。どんなミュージック音楽性ができるような組織なのか、チームなのかということが非常に重要だと思っていて。25, 26, 136, 137, 138
	2. 創造の持久力を育む	子どもも保育者も創造する持久力をつける。	A：音楽だけでなくすごく大きなことは、その創造する持久力っていうことをキーワードにしてるんですね。保育の中心のキーワードに。 A：保育者も創造する持久力をずっと発揮してほしい。
	3. 創造性を育む音楽の役割	子どもの創造性を育む上で音楽は必要である。	A：自分の命というものを全うさせてくれるというか、その手段の一つは音楽だと思いますね。41, 42

	4. 複合的総合的な表現活動	子どもの表現活動を複合的総合的に捉える。	A：音楽と絵画造形、身体表現をいっしょくたに複合的総合的にやるイメージ、それと言語の表現もそんな感じ。 B：年長児くらいになると、理事長が創ってくれた曲にダンスやストーリー、台詞、衣装を子ども達だけで創るんです。79 (表現遊び発表会：5歳児)
	5. 尊重される子どもの自由な取り組み	子どもの自由な表現の仕方を尊重する。	A：自由な表現だからみんながバラバラなことやってる、別にねころんでもいいし。参加できなくてもいいし、したくなったらやればいいという感じで。27, 29 (音楽遊び：2～5歳児)
② 創造の源泉	6. 創造のハードルを低くする	創造の捉えについてハードルを低くすることが重要である。	A：創造って言われたとたん結構たいそうなものを感じるんですよ。もっとハードルを低くするっていうのは非常に重要やと思って。143
	7. 子どものやりたい意欲を支える環境	子どものやりたいことが常にできる環境を構成する。	A：自分達のやりたいという意欲とかそれを常にやれるような環境にしておくと、創造性は育まれていく自然に。100, 101, 103, 105, 106
	8. 違いが創造の源泉	失敗を恐れずにどんどん間違っ創造する。	A：僕がいつも言ってるのが、違いが創造の源泉やってことなんです。だからどんどん間違っ創造しようって言ってるんですよ。121, 122
	9. 子どもの創造を支える保育者の許容	子どもの自由な探索を許容する。	A：他のところでかなりある意味自由を許容してないと、その場面に到達しないっていうことがよくあります。88, 89, 90, 91, 93, 94
	10. 子どもにとっての無の時間	子どもの無になる時間を大切にする。	B：広いベンチでばやーンとしてる子もいれば、虫と語らってる子もいるし。 (ランチルームから保育室に戻る道中：3～5歳児) A：そんな体験があるからダンゴムシの歌が鼻歌で出てくるんやろ。でないと、プリコラージュできない。81, 117, 129
	11. 創造と想像は創発的	創造と想像は創発的な関係である。	A：子どもの遊びとか見てたら行為によって想像したり、想像して行為したりやけど。音楽の場合やったらほぼ同時、創発的かなあ。想像はかなり重要です。64, 65, 66, 67, 68
③ 表現の原形	12. 表現することの気持ちよさ	子どもが感じる表現の気持ちよさを大切にする。	A：身体的な快が、気持ちよさがあるかどうかっていう感じかな。出したい声、音、動き、気持ちいいっていう。115
④ 創造性を育む音楽表現活動の芽生え	13. 日常的に遊びの中で子どもが創り出すこと	子ども達が身の回りのモノにかかわって日常的に音を創り出す。	B：意図的にそういうきれいな音色の楽器も勿論あるんだけど、楽器じゃないモノで音を楽しむとか、リズムを楽しむっていうのも、日常的にしているから。 (日常の遊び：0～5歳児)
			C：運動会で竹を叩いたりとかそのくらいの時期に、ふっと園庭みてみたら、鉄棒とか椅子とかを叩くとかいうのが出てきたりするんですよ。73 (運動会の取り組みにおける竹を使用した撥打ち：5歳児、日常の遊び：3～5歳児、室内では0～5歳児)
			B：それは日常的に、その時期じゃなくてももっとちっちゃい時期の子もやります。 (日常の遊び：0歳児から)
			B：低年齢だったら缶や洗面器とかにテープをぐるぐるやるだけでも太鼓みたいになって。手づくり楽器でもその音の面白さとか、振動を感じるとか。音だけではない動きとか。なんかそういうふうなものは、もう遊び道具の中にあるので。(日常の遊び：0歳児から)
			B：小さい時からそうやって育ってきた子たちが大きくなってきたら、自分で今度は色々試しながらやり出すんです。太鼓創るとか割とよくやってる。(日常の遊び：3歳児頃から)
			C：この間おもしろかったのが、年長さんが色々な容器を叩いてるんですよ。で、主幹の先生が「なんでそんなきれいな音なるんや」て問いをしたら、「これや」って言ってトイレトペーパーの芯にヤクルトのカップをつっこんでるんですけど、その「ヤクルトのカップがええ音なるんや」って言うて、こうはめてやってみたりしてる。23, 78 (日常の遊び：5歳児)

⑤ 子どもと保育者が影響し合う表現活動	14. 子どもに密着した曲づくり	日常の子どもの言葉や遊びから音楽(歌)を創る。	B: 理事長がクラスの曲を創ってくれるんだけど、それは、一年の子どもの遊びとかつぶやきが word になってるから、子どもと密着してる曲ができるんですね。 (表現遊び発表会: 3~5 歳児) A: 自分達が体験してきたことが蘇ってくるから子ども達が笑うんですよ。 (表現遊び発表会: 3~5 歳児) B: 嬉しくて楽しくて、「理事長先生ありがとう」って言って笑い転げるんです。 12, 22, 52, 54, 55 (表現遊び発表会: 3~5 歳児)
	15. 仲間のように影響し合う存在	出来事の中に入り込み子どもと保育者が仲間のように影響しあう。	A: 出来事のそのことの中に入り込むような、子ども達を客観的に見たり、操作しようとか、対象化しようとかそういうことではなくて。 A: 子どもと同じ次元で中に入っていくような、子ども達が仲間として、お互い影響しあう一人としてやるようなイメージにしてるんです。125, 130
	16. 子どもと保育者の往環する表現活動	子どもと保育者の表現活動が往環する。	A: 年度末に 3, 4, 5 歳児が表現遊びの発表会をするんですけど、子ども達の保育の活動から、子ども達のつぶやきとか言葉をできるだけ使って歌を創る。 (表現遊び発表会: 3~5 歳児) それで子ども達がまた自ら身体活動に結び付けたり、セリフに結び付けたり。 (表現遊び発表会: 5 歳児) B: 子どもらが全部していく(創っていく)んですね。その時、やっぱり音楽が、その曲(理事長が創った曲)があると思う。 (表現遊び発表会: 5 歳児) C: 理事長がお誕生日会の時とかにあそび屋さんというので、ギター弾いて「あそぼ~(♪さんぽみたいに)」とか歌ってやるんですよ。それを前にして自分達でギターみたいなものを段ボールで創って歌ってる。理事長みたいになり切って演奏してる。43, 48, 50, 51 (誕生会: 5 歳児)
	17. 応答的な表現活動から生まれる高揚感	エモーショナルなノリのままに遊ぶ。	C: 運動会で神輿の「わっしょいわっしょい」ていうエモーショナルなノリのままに、理事長と園長と年長児がこのリズムに合わせて撥で叩くんですが、練習とかは一切なくて毎回遊んでるんですよ。 (運動会の取り組みにおける竹を使用した撥打ち: 5 歳児) C: 理事長の叩くリズムを模倣して叩いていく中で、トントントントントというベースのリズムはあるけれども、即興でそのレスポンスの遊びが繰広げられ、高まっていくような感じのこともやっていて。 (運動会の取り組みにおける竹を使用した撥打ち: 5 歳児) C: 練習してこうとかではなくて、グルーピング ³⁾ みたいなことがあって、それも運動会の一部としてあります。(運動会: 5 歳児)
⑥ 創造性を育む音楽表現活動の取り組み	18. オリジナル曲で取り組む日常の保育	保育者の創造の一環として遊びのためのオリジナル曲を創る。	A: オリジナルの手遊びは、子ども達を集めるために用いるということではなくて、保育者の創造の一環としての取り組みとしてです。 1, 2
	19. 行事と音楽の絡み合い	行事のテーマに沿ったオリジナル曲(歌)を創る。	C: 保育者が創った歌を BGM に競技が繰広げられる感じですが、その歌に合わせてプログラムがあるんじゃない。やりたいテーマがあるから、そこに歌を創ってそれにのって遊んでいくようなことが繰広げられているんです。13, 14, 15 (運動会: 0~5 歳児)
	20. 外部講師と音楽とのつながり	外部講師にも子どもの自由な表現を支える音楽活動を求める。	A: 音楽の先生にもだからこれにのって、ハイ! っていう感じの取り組みではない。ただ、音楽を提供してくれる人は、プロフェッショナルな人になっているという感じで。4, 5, 24, 97, 109, 114, 116, 118
⑦ 内から生まれる子どもの表現	21. 音楽にノル子どもの表現	音によって子ども一人ひとりの世界を拓くことを重視する。	A: 音楽ってそもそも古くからずっとあるじゃないですか。叫ぶ、遠吠えみたいな野性的なその内から湧いてくる自由を味わいたいということ、その内から湧いてくる自由と、外部講師の先生との音との出会いによって、一人ひとり全く違う個性、特性を発揮できる世界を拓く、音によって世界を拓いていくような。

			B：曲がアップテンポになってきたら足がムズムズしてきたり、身体からこうゆすったりとか、もうなんか自然に身体動かしてはる。 (音楽遊び：2～5歳児)
			A：一番目指してるところは音に溶けるってことかな。21, 56
	22. 共振する子どもの表現	音楽を介して子ども同士が共振する。	A：聾啞の双子の兄弟がうちではるんですよ。その子達が共振するとか、もちろん言葉はしゃべれないけど、一緒に揺れてまさに歌っている。だから言葉がなくても歌えるっていう、そういう共振もありますよね。30, 36, 39 (日常の遊び・表現遊び発表会：5歳児)

2. 結果図について

表1で示された各カテゴリーや概念がどのように関係しているかを矢印で表した(図1参照)。なお、概念を1つにまとめた上にカテゴリー名を表記している。

3. ストーリーラインについて

結果図に基づき、各カテゴリーの概念間の関係を踏まえながらストーリーラインを記述する。以下、カテゴリーは『 』概念は【 】ヴァリエーションは〔 〕で表記する。

(1) 『①保育の価値観』カテゴリー

このカテゴリーは、Mこども園での保育や音楽表現活動の在り方について語られたカテゴリーである。Mこども園では、ミュージッキングの考え方を踏まえた【1. 人とのつながりを重視する表現活動】を土台に、子どもも保育者も【2. 創造の持久力を育む】ことを保育目標の中心に捉えている。また、【3. 創造性を育む音楽の役割】に示されるように、子ども達の創造性を豊かに育むためには音楽が必要であると考えている。なぜならば、音楽は人が生きることそのものと深く結びつき、心身と一体化したものと位置づけているからである。加えて、表現活動を行う際には造形、音楽、身体、言葉など、様々な表現が絡み合う【4. 複合的総合的な表現活動】として展開することを念頭においている。実践においては、【5. 尊重される子どもの自由な取り組み】を重視し、こうしなければならないという枠にはめるのではなく、子ども達のやってみたいと思うタイミングで参加すればよいと考えている。このカテゴリーの内容は、『②創造の源泉』の具体的体験にかかわるカテゴリー③④⑤⑥⑦すべてに関連しており、各カテゴリーを体験していく過程において、【2. 創造の持久力を育む】ことができると考えている。

(2) 『②創造の源泉』カテゴリー

このカテゴリーは、園で実践されている音楽表現活動を通して、創造の持久力を育むための根本的な考え方を

示している。Mこども園の園長らは創造性を育む音楽表現活動の実践において、子ども達や保育者が正解、不正解の評価軸にとらわれ表現することをためらわないよう、【6. 創造のハードルを低くする】ことが必要であると考えている。また、日常的に【7. 子どものやりたい意欲を支える環境】を構成することや、その中で、【8. 違いが創造の源泉】であるという考えのもと、失敗を恐れずにどんどん間違えて創造することの重要性を受け止めている。さらに、子どもが表現素材にかかわって新たに变化させながら創り続けるには、【9. 子どもの創造を支える保育者の許容】や【10. 子どもにとっての無の時間】を確保したりすることが大切と考えている。なぜなら、子どもが無心になって考えたり試したりする体験が創造につながると捉えているからである。また、子どもの遊ぶ姿から【11. 創造と想像は創発的】と捉えており、想像が創造する上での重要な要素になると考えている。

(3) 『③表現の原形』カテゴリー

このカテゴリーは、主体的に子どもが表現している際に湧き起る感情について示されている。子どもが主体的に何かを表現する際には【出した声、音、動き、気持ちいいっていう】【12. 表現することの気持ちよさ】を伴うと考えているため、音楽表現活動の実践ではそのような子どもが感じる快の感情を大切にすることを重視している。このカテゴリーは、『④創造性を育む音楽表現活動の芽生え』『⑤子どもと保育者が影響し合う表現活動』『⑥創造性を育む音楽表現活動の取り組み』『⑦内から生まれる子どもの表現』と密接に関連し、これらの原動力になると考えている。

(4) 『④創造性を育む音楽表現活動の芽生え』カテゴリー

このカテゴリーは、子ども達がどのようにして日常的に音やリズムを創り出しているかの語りであり、【13. 日常的に遊びの中で子どもが創り出すこと】のみで構成されている。Mこども園の園長らは、【13. 日常

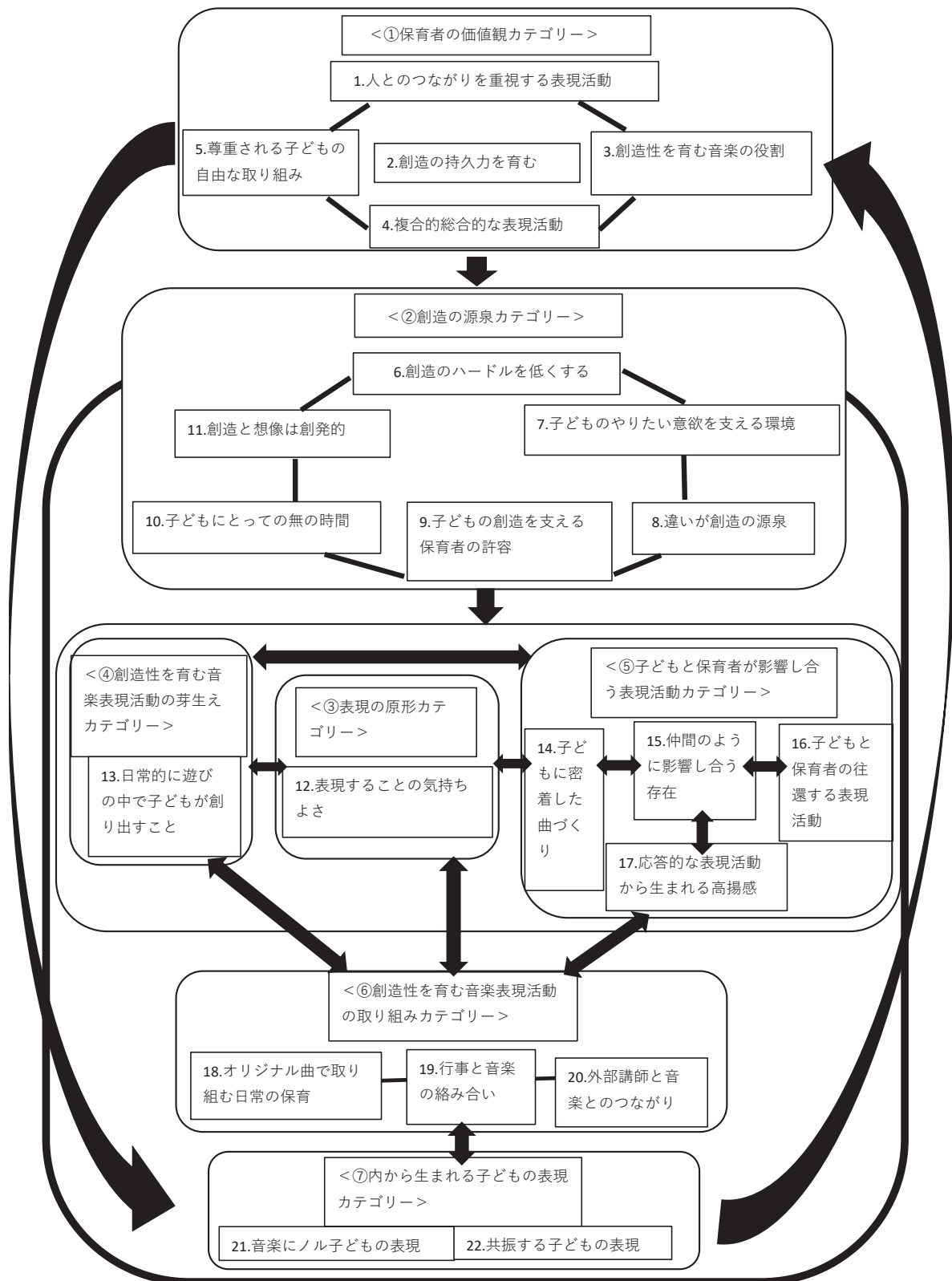


図1 M-GTAによる結果図

的に遊びの中で子どもが創り出すこと】を重視し、日頃の遊びの中で、乳児期から身の回りのモノにかかわって音を聴いたり探索したりする体験が、幼児期の自ら目的を持って音やリズムを創り出す姿につながっていると考えている。子どもの創造性は日常の遊びの中で育まれるが、その芽生えは乳児期の体験からの連続性によるものと考えている。また、このカテゴリーは、『⑤子どもと保育者が影響し合う表現活動』『⑥創造性を育む音楽表現活動の取り組み』と関連しており、日頃の遊びと行事等における遊びが往還しつつ新しい表現が生み出されていると捉えている。

(5) 『⑤子どもと保育者が影響し合う表現活動』カテゴリー

このカテゴリーは、日常の保育において子どもと保育者が互いに影響し合いながら展開する、Mこども園の音楽表現活動についての語りであり、『⑥創造性を育む音楽表現活動の取り組み』を具体的に示している。Mこども園では、子どもの遊びやつぶやきを基に、【14. 子どもに密着した曲づくり】を行っているため、創作された曲は子どもにとってもイメージしやすく、親しみのある曲として受け止められている。そして、今度はその曲を土台に子ども達が新たな表現へと創り変えていく【16. 子どもと保育者の往還する表現活動】が見られる。また、子どもと保育者が共に活動する際には、保育者が一方的に教え込むような形ではなく、互いが【15. 仲間のように影響し合う存在】として音楽を創り出すことを意識している。さらに、園長らと子ども達は、リズムを介した即興的なやり取りによって【17. 応答的な表現活動から生まれる高揚感】に包まれるが、そうしたエモーショナルな感覚を体感することも表現活動の核として重視している。

(6) 『⑥創造性を育む音楽表現活動の取り組み』カテゴリー

このカテゴリーは、Mこども園における『①保育の価値観』を基盤とした創造性を育む音楽表現活動の概要である。創造することを柱に据える同園では、保育者自身で手遊びを創るなど、【18. オリジナル曲で取り組む日常の保育】を実践している。オリジナル曲を重視する理由は、子ども達を動かす合図として音楽を用いるのではなく、〔保育者の創造の一環の取り組み〕として位置づけているためである。また、行事においても保育者は、【14. 子どもに密着した曲づくり】を土台に、行事のテーマに沿った歌を創っている。【19. 行事と音楽の絡み合い】において重要なことは、創られた歌が先

にあるのではなく、テーマに沿った内容を歌にし、子ども達の表現を支えているということである。加えて、【20. 外部講師と音楽とのつながり】においても、音楽技術の指導を主とするのではなく、『⑦内から生まれる子どもの表現』を引き出すような活動に力点を置き、外部講師の音楽的な専門的力量に期待している。保育者は、【18. オリジナル曲で取り組む日常の保育】【19. 行事と音楽の絡み合い】【20. 外部講師と音楽とのつながり】を有機的に関連させ、【4. 複合的総合的な表現活動】を基盤としながら、絶えず創造することを軸に表現活動を展開している。

(7) 『⑦内から生まれる子どもの表現』カテゴリー

このカテゴリーは、子ども達が音楽に喚起され、自身の内から湧いてくる自由な感情を体現する重要性について語られている。Mこども園の園長らは、【21. 音楽にノル子どもの表現】に示される〔曲がアップテンポになると足がムズムズしてきたり身体を自然にゆすったりする〕姿や、【22. 共振する子どもの表現】に示される、音楽を介して友達と一緒に揺れるような姿を重要視し、湧き起こる感情の中で自分自身の世界を拓いていくような体験が肝要であると捉えている。ここで語られた内容は、『⑥創造性を育む音楽表現活動の取り組み』を行う際に、保育者が強く意識している子どもの姿である。

Ⅳ 考察

1. 7つのカテゴリーの総括

分析によって生成された7つのカテゴリーと各概念間の関係を説明しながらストーリーラインを述べてきたが、Mこども園における子どもの創造性を育む音楽表現活動についての捉え方や実践については、次のようなことが言えるだろう。

創造性を育む音楽的表現活動について、Mこども園では【13. 日常的に遊びの中で子どもが創り出すこと】を重視し、乳児期から幼児期への遊びの発達を踏まえた【7. 子どものやりたい意欲を支える環境】を構成している。また、【16. 子どもと保育者の往還する表現活動】を通して日常の遊びと行事をつなぐ等、園生活のあらゆる場面で創り出すことを重要視している。さらに、子どもと保育者、どちらにおいても【2. 創造の持久力を育む】ことを第一に考え、その力が創造性を育む音楽表現活動の基盤になると捉えていることも明らかとなった。これは、本研究で定義した創造性の捉え方と共通するところである。加えて、子どもの創造性を育む音楽表現活動は音楽表現に限定するものではなく、造形表現、身体

表現、言語表現などを含めた【4. 複合的総合的な表現活動】と捉えていることが確認できた。

すなわち、「子どもが創り出すことを支える環境－乳児期と幼児期の発達を踏まえた遊びの連続性－」「子どもと保育者の往還する表現活動を通して日常と行事をつなぐ」ことを意識して、創造性を育む音楽表現活動について捉えていることがわかる。換言すると、園生活のあらゆる場面で「創造の持久力を育む」ことを意識するということである。

実践においては、保育者の【14. 子どもに密着した曲づくり】が、【16. 子どもと保育者の往還する表現活動】を引き出していることや、子どものみならず保育者も主体性を持ち、互いが【15. 仲間のように影響し合う存在】として、共に創り出すことを重視していることがわかった。さらに、表現活動の際には子どもの内側から湧き起る快の感情に着目し、【12. 表現することの気持ちよさ】や【17. 応答的な表現活動から生まれる高揚感】を基盤に、『⑦内から生まれる子どもの表現』が表出するような音楽表現活動が重要であると考えていることが確認できた。

すなわち、創造性を育む音楽表現活動を実践する際には、「子どもに密着した曲づくりが引き出す子どもと保育者の往還する表現活動」「仲間のように影響し合う子どもと保育者のつながり」「応答的な表現活動における保育者の主体性」「表現に伴う内から湧き起る感情を土台に置く」を意識しているということが言えるだろう。

これをさらに集約すると、「表現に伴う快の感情を土台に、園生活のあらゆる場面で子どもと保育者が仲間のように影響し合い、創る体験を重ねていくこと」と意識し、実践すべきと解釈することができる。

以上のことから、創造性を育む音楽表現活動の捉え方とその実践については、上述の「子どもが創り出すことを支える環境－乳児期と幼児期の発達を踏まえた遊びの連続性－」「子どもと保育者の往還する表現活動を通して日常と行事をつなぐ」といった「創造の持久力を育む」視点、「子どもに密着した曲づくりが引き出す子どもと保育者の往還する表現活動」「仲間のように影響し合う子どもと保育者のつながり」「応答的な表現活動における保育者の主体性」といった「生活のあらゆる場面で創り出す体験の積み重ね」の視点、「表現に伴う内から湧き起る感情を土台に置く」視点を意識していることが明らかとなった。以下にこれらについて考察していく。

2. 各視点についての考察

(1) 創造性の持久力を育む

①子どもが創り出すことを支える環境－乳児期と幼児期

の発達を踏まえた遊びの連続性－

M こども園では、【13. 日常的に遊びの中で子どもが創り出すこと】に示されるように、乳児の頃から楽器や手づくり楽器に触れたり、様々な音の違いに気付いたりする環境構成の工夫がなされ、子ども達が主体的に音を楽しむ体験が積み重ねられている。そして、幼児期を迎えた頃にはその体験が、子ども自ら、音をイメージして手づくり楽器を製作する遊びへとつながっている。音に気付き感じる（音感受）ことから、面白い音を探したり鳴らしたりして遊ぶ。さらにもっと面白くできないか身の回りのモノにかかわり、何度も試して創造していく。

子ども達は様々な素材に触れ、試行錯誤しながら自分なりのいい音を見つけていくが、このような自ら創り出す力を育てていくためには、【7. 子どものやりたい意欲を支える環境】を構成し、乳児期から幼児期への遊びの発達に連続性を持たせ、創り出す体験を積み重ねていかなければならない。

また、創造の過程における子ども達の試行錯誤は、領域「表現」の内容「(5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ」の解説に示される、「自分なりの素材の使い方を見付ける体験が創造的な活動の源泉である」に相当するであろう。子どもの創造の芽を育むことは決して特別な体験ではなく、日常の遊びの中に子どもの興味・関心に応じた準備がどれだけなされているかに左右される。また、準備された表現素材を用いて『②創造の源泉』に示されるような、どっぷりと浸って自由に表現することが許容されているからこそ、自分らしいアイデアを創出することができると考えられる。

②子どもと保育者の往還する表現活動を通して日常と行事をつなぐ

日常の遊びと行事が切り離されたものであると、活動の出来栄をゴールに設定し、計画的に積み上げていくことが多くなる。特に、音楽にかかわる発表では保育者が子ども達に指導する形で練習が進められ、楽譜通りに演奏することや劇遊びをストーリーに沿って演じることなどに目標が置かれる。しかしながら、M こども園では、【16. 子どもと保育者の往還する表現活動】が行事と日々の遊びをつないでおり、例えば園長 A の創った曲に合わせてダンスや衣装、劇のシナリオづくりを行うなど、子ども達が遊びの中で膨らませた【4. 複合的総合的な表現活動】を発表の場で披露している。このように、行事の場面においても子ども達の創造する力や、創造性が育くまれる貴重な機会として活かすことを重視している。行事や発表会の在り方は、その出来栄ではなく何を発表したいのか、何のために発表するのかという

『①保育の価値観』に拠るところが大きいと考えられる。

(2) 生活のあらゆる場面で創り出す体験の積み重ね

①子どもに密着した曲づくりが引き出す子どもと保育者の往還する表現活動

M こども園では、保育者が創った【18. オリジナル曲で取り組む日常の保育】に力点を置いている。同園が子どもだけではなく、保育者の創造の持久力を育むことにも力を入れており、またそれが、子どもの創造性を育むことにつながると重視していることがわかる。とはいえ、創作に慣れていない保育者が手がかりもなく創作に臨むことは困難を伴うであろう。そうした中、【14. 子どもに密着した曲づくり】に示される、子どもの遊びやつぶやきを創作の素材に用いることはアイデアの糸口となり、【6. 創造のハードルを低くする】ことにもつながると考えられる。また、【14. 子どもに密着した曲づくり】は【16. 子どもと保育者の往還する表現活動】を引き出す拠り所でもあり、両者それぞれの表現が創造の起点となって往還し、新しい表現を生みだしていることがわかる。子どもと保育者がイメージを共有できる身近な楽曲が基盤にあるからこそ、そこからさらに表現を発展させていくためのやりとりが可能になると考えられる。

これまで、子どもが紡いだ表現の芽を創造的な音楽表現活動に繋げることは経年的な課題とされてきたが、その一因として、保育者がどのように活動を展開していけばよいのか、その方法がわからないということが挙げられてきた(駒, 2013)。M こども園の実践における、子どものつぶやきや言葉を素材とする保育者の曲づくりや、子どもと保育者の往還する表現の在り方が、課題を乗り越える一手となる可能性は高いと思われる。

②仲間のように影響し合う子どもと保育者のつながり

先述したようにM こども園では、保育者が教えるという方向ではなく、子ども達と【15. 仲間のように影響し合う存在】として、一緒に創り出していくという関係性を大切にしている。こうした関係性を重視するのは、【1. 人とのつながりを重視する表現活動】にある、ミュージッキングの考え方が音楽表現活動の土台にも根付いているからではないかと考える。

吉野(2021)は、「私達と世界とのつながりは常に現在形で、ミュージッキング＝パフォーマンスの最中には〈いま〉〈ここに〉〈共に〉共存し、繋がっていることの喜びを共有する身振りだけが存在する。この繋がりをそこに居合わせる人々と共に『探求・確認・祝福』すること、これこそミュージッキングという営みなのだ」とい

うスモール(1998, 2011 訳)の主張を踏まえ、音楽作品そのものの価値ではなく「行為の立場」を示す考え方の一つとして紹介している。保育現場における子どもと保育者の表現する姿に置き換えると、それぞれが自己発揮し主体的に物事にかかわりながら、お互いのことを受け止め、共に創り上げていく喜びを感じるということに換言できるであろう。

また、壽谷ら(2021)は「ミュージッキングは自由度の高い音楽活動」であり、「大人が教え、子どもが学ぶといった力関係の壁を越えることができていく」活動と示している。その具体的な活動について「即興性が求められる、音楽の原点により近い活動として再認識できる」と述べている。すなわち、保育者と子どもが教え教えられるといった関係性を越え、応答的即興的な表現のやり取りを楽しむことができる活動と言い換えることができるだろう。

M こども園では、以上のようなミュージッキングの要素を踏まえた音楽表現活動を展開する中、保育者と子どもが互いの創造する力や創造性を高める存在であるということが言えるだろう。

③応答的な表現活動における保育者の主体性

M こども園の実践において、保育者は【7. 子どものやりたい意欲を支える環境】を整えるだけではなく、先述のとおり、自らも子ども達と【15. 仲間のように影響し合う存在】として、共に創り出すことを意識している。保育者も表現者であるという意識を持って遊びの面白さがより広がるよう主体的に表現し、その表現活動が応答的で響き合うものになるようにしている。

川田ら(2009)は「保育者の役割は、よく言われるような黒子のようなものではなく、自らも主体としての願いをもち、それを子ども達の願いに結びつけていくという『姿の見える』保育者である」と述べている。さらに中村ら(2020)は「保育者や保護者や地域が共に主体として学びに参加することは、子どもの主体性を阻むものではない。むしろ、『幼児の主体的な活動が確保される』ことに繋がる」と述べている。

M こども園の保育は、子どもと保育者それぞれが行動主体として存在しながら共同する共主体⁴⁾の保育であり、同園の【1. 人とのつながりを重視する表現活動】にも通底しているということが言えるだろう。

加えて、【17. 応答的な表現活動から生まれる高揚感】の語りに見られる、園長Aの表現を子ども達が模倣するという箇所注目したい。

佐藤(1995)は、伝統芸能の伝承による学び方をひいて「なぞり(模倣)」と「かたどり(創造)」は対立する

ものではなく循環するものであり、「表現者の学びとは、『なぞりながらかたどり』『かたどりながらなぞる』いとなみ」であると示唆している。すなわち、学ぶことは真似ることから始まり、真似ることは創造の源になるということである。

子ども達がエモーショナルなノリの中で保育者のリズムを模倣して遊ぶ体験は、今後、自ら創り出すリズムのアイディアにつながると考えられる。子どもの表現を拓く保育者の主体的なかかわりは、子どもの創り出す力を引き出しているということが言えるだろう。

(3) 表現に伴う内から湧き起る感情を土台に置く

M こども園の園長らは、【3. 創造性を育む音楽の役割】を創造のためのきっかけとして捉え、音楽を介して自由に表現することを活動の軸に置いている。

音楽は、その曲を構成する要素によって人々に様々な印象を与え感情を喚起させるが、身体の動きを伴うことでより直接的に【12. 表現することの気持ちよさ】や楽しさ、満足感、解放感といった快の感情を味わうことができるとされる。さらに、他者とその音楽を介して活動を共有している時は、【17. 応答的な表現活動から生まれる高揚感】に示される、われを忘れて入り込むようなグルーピング³⁾の状態になりやすいということも音楽の特性と言えるだろう。園長らは、そうした音楽の力を借りながら表現活動が形骸化されたものではなく、内から湧き起るエモーショナルな感覚と一緒に表現している【1. 人とのつながりを重視する表現活動】に重きを置いている。【21. 音楽にノル子どもの表現】に示されるように、音楽に身を委ね自分の気持ちのままに、夢中になって表現することが創造する上で重要と考えていることがわかる。

以上のようなことから、M こども園における創造性を育む音楽表現活動とは、表現に伴う快の感情を土台に置きながら、園生活のあらゆる場面で創り出す体験を積み重ね、創造の持久力を育むそのプロセス全体を指していると捉えられる。

V 今後の課題

3名の園長へのインタビューの結果、M こども園において、子どもが創造の持久力を育みながら自らの創造性を豊かにしていくプロセスや、保育者の援助の在り方が明らかになった。しかし、【16. 子どもと保育者の往環する表現活動】において、【13. 日常的に遊びの中で子どもが創り出すこと】で培われた、子ども達の創造する力がどのように表出されたのか、実際には表出してい

る可能性もあるが、インタビューからは部分的にしか引き出すことはできなかった。具体的には、【16. 子どもと保育者の往環する表現活動】における、園長Aのリズムを模倣しながら応答している子ども達の表現が、子ども達自身で創り出したリズムでの応答の表現に変化していったのか否かを確認できなかったこと等である。乳児期に始まる身の回りのモノにかかわって音を探索したり探究したりする体験が、幼児期においてどのような音楽的表現に移行していくのかを、さらに調査していきたいと考える。

また、今回は園長Aを中心とした同一法人内の園長への調査であったため、得られた知見に一般性が担保されているとは言い難い。従って、調査対象を広げ、他の法人園にもインタビュー調査を行いその結果を比較・検討しながら、創造性を育む音楽表現活動についての概念や捉え方を拡張していきたいと考える。

注

- 1) 本研究における創造性を育む音楽表現活動とは、身の回りのモノを探索・探究しながら音やリズムを創り出すことと捉えている。
- 2) ミュージッキングとは、クリストファー・スモールが提唱した概念で「音楽する」という動詞の動名詞形(musicking)である。スモール(1998, 2011 訳)は『ミュージッキングー音楽は〈行為〉であるー』の中で、音楽がモノ(作品)として完結するのではなく“音楽するという行為”が重要であり、そこから生まれる様々な人と人、人と作品、音と場等の関係性に注目している。また、「どんな種類の音楽パフォーマンスであれ、私たちがそこに参加して、音楽するとき、私たちは、結び合わせるパターンの本質を探り、その妥当性を全身で確認し、自分たちとそのパターンとのつながりを祝っている。(略)私たちはパフォーマンスが続く限り、言葉では決してできない方法で、パターンと関係を複雑なままに経験するのだ」(p.270)は、共に“音楽すること”生まれる人々のつながりを、「探求」し「確認」し「祝う」ことがミュージッキングを読み解くキーワードとなることを示している。このことから、M こども園の【1. 人とのつながりを重視する表現活動】を、ミュージッキングの考え方を土台とした表現活動として捉えている。
- 3) 山田(2017)は、グルーヴについて、『『感じる』『熱中する』『のる』といった感覚的で感情的なことばと同じ意味で用いられる』と示している。
- 4) 無藤ら(2020)は、OECDの示すco-agencyを「みんなで変革していく、共同の変革力。その『共同の変革力』を育てるために、みんなが学び合う主体であることを『共主体』という言葉で進めていこう」と提案している。

文献

藤田浩子・清水晶子・川口昌子・岡佐智子(2019). 子どもの「あそび」から「創造性」を引き出す保育－実習生を迎える

大谷幼稚園からの発信－大阪大谷大学教育学部幼児教育実践研究センター紀要, 9, 77-92.

出原和美 (2016). 音楽的な表現を創り出す－自分らしく表現する・友達と一緒に楽しむ体験を通して－ 幼児教育じほう, 44 (6), 23-26.

川田学・津田千明 (2009). 幼児期における協同性とその援助の視点を探る 香川大学教育実践総合研究, 18, 65-78.

木下康二 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂

木下康二 (2007). ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂

小池美知子 (2015). 5歳児クラスの声と動きの活動に見られた表現の様相－オノマトペの絵本を題材に－ 松山東雲女子大学人文科学部紀要, 23, 15-24.

小池美知子 (2019). 5歳児の協同的な即興アンサンブル生成のプロセス 松山東雲女子大学人文科学部紀要, 28, 22-33.

駒久美子 (2013). 幼児の集团的・創造的音楽活動に関する研究－応答性に着目した即興の展開－ ふくろう出版 53-54.

三輪雅美 (2018). 幼児期における音の探求活動－新幼稚園教育要領からみる表現の育ち－ 学校音楽教育実践論集, 第2巻, 138-139.

無藤隆・大豆生田啓友 (2020). 特別対談 子どもと大人が学び合う「子ども主体」から「共主体」の保育へ 新幼児と保育 第10巻第1号 小学館 18-23.

内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018). 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 フレーベル館 289-301.

中村恵・小柳和喜雄・矢田匠・矢田明恵・古川恵美 (2020). 共主体が育まれる学習環境検討～フィンランドにおける対話による示唆～ 畿央大学紀要, 第17巻第2号, 11-20.

南谷悠子・永津利衣 (2022). 幼児の音とかかわる姿にみる気づきと保育への影響－3歳児クラスの新聞紙を用いた創造的な音遊びを通して－ 鈴鹿大学教職教育センター紀要, 第4号, 15-25.

乙部はるひ (2018). 幼児の遊びにおける音楽的表現の展開 保育学研究, 第56巻第2号, 75-86.

坂井康子・佐野仁美・岡林典子 (2023). 創造性と協同性を重視した幼児の表現遊び－音楽づくりへのつながりを視野に入

れた4歳児の実践から－ 甲南女子大学研究紀要, I (59), 143-150.

佐藤学 (1995). 終章「表現」の教育から「表現者」への教育へ 4「なぞり」と「かたどり」－存在の軌跡としての「学び」へ 佐伯胖・藤田英典・佐藤学 (編) 表現者として育つ 東京大学出版会 234-238.

Small, C. (1998). Musicking: The Meanings of Performing and Listening. 野澤豊一・西島千尋 (訳) (2011). ミュージッキング－音楽は〈行為〉である－ 水声社 30-31, 270.

壽谷静香・リチャードK. ゴードン・栗原清・竹澤栄祐・筒石賢昭・中山由美・芳賀均・安居總子・安久津太一 (2021). ミュージッキングの実践を通じた共生の理念及び行為の中の省察の具現化 共生科学, 12巻, 55-67.

田崎教子 (2013). 「表現 (音楽)」に対する保育者の保育観と音楽観－質的な質問紙調査をもとにして－ 東京福祉大学・大学院紀要, 第4巻第1号, 43-54.

坪能由紀子・木村充子・味府美香・小川博久・裴珉卿 (2005). 幼児の創造的な音楽活動の開発に関する研究－幼児の音楽活動の変容の分析・解釈を通して－ 日本女子大学大学院紀要, 家政学研究科・人間生活学研究科, 第11号, 225-233.

Vygotsky, L. S. (1930). Воображение и творчество в детском возрасте. 広瀬信雄 (訳) (2002). 新訳版子どもの想像力と創造 新読書社 14.

山田陽一 (2017). 響きあう身体－音楽・グルーヴ・憑依－春秋社 52.

吉野秀幸 (2021). 音楽を“ゆる～く”哲学しよう (後)－2019年度公開講座に基づく考察－ 大阪教育大学紀要, 人文社会科学・自然科学, 第69巻, 207-225.

謝辞

本研究の調査にご協力くださいましたMこども園の理事長、園長の皆様に深く感謝申し上げます。

付記

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

How Musical Expression Activities Aimed at Fostering Children's Creativity Are Perceived and Practiced at M Center for Early Childhood Education

: Insights from an Interview with Center Directors

Tomoko Tanaka

Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School

The objective of this study was to elucidate how musical expression activities that foster children's creativity are perceived and practiced at M Center for Early Childhood Education (hereinafter referred to as "M Center"). A semi-structured group interview was conducted with three directors of M Center's affiliated centers, one of whom also serves as the chairman of the board of directors. The data collected were subjected to qualitative analysis using the modified grounded theory approach (M-GTA), resulting in the generation of 22 concepts and 7 categories. Results indicate that the directors are constantly mindful of the continuity of play from infancy to early childhood, the connection between daily play and events, and the importance of creating an environment conducive to creativity in all aspects of early childhood. Furthermore, our study revealed that a main emphasis is placed on the development of creative endurance in both children and caregivers, viewing this ability as the foundation for the musical expression activities that foster creativity. In terms of practice, we found that the expressive activities were developed around the positive emotions associated with expression. Furthermore, we observed reciprocal exchanges between caregivers and children during the expressive activities. For example, the songs that caregivers made up by incorporating children's murmurs were transformed by children into new expressions. In addition, our findings suggest that caregivers recognize the importance of possessing agency as expressers and co-creating expressions by engaging in mutual interactions with the children, influencing one another. In summary, the musical expression activities at M Center that foster creativity encompass the entire process of accumulating creative experiences in all situations, are based on the positive emotions associated with expression, and develop creative endurance.

Key words : creativity, creative endurance, the connection between daily play and events, reciprocal expressive activities between caregivers and children, positive emotions associated with expression